

Title	朽木量君提出学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2003
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.72, No.1 (2003. 2) ,p.128- 134
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20030200-0128

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

分の訳文についての指摘のように傾聴すべきものもあるが、すべて本書の学問的評価を「労作というに足る」と評価したうえでの批判である。本審査要旨における本書の評価に変更を加える必要はないであろう。

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授

副査 学習院大学名誉教授

副査 慶應義塾大学名誉教授 文学博士

学識確認担当者 慶應義塾大学名誉教授 文学博士

清水 祐司

清永 昭次

坂口 昂吉

小川 英雄

朽木量君提出の博士学位請求論文「墓標の民族学・考古学的研究」は以下のような四部構成をとり、その前後に序章と終章を配する。

序章 墓標の民族学・考古学的研究の目的と方法
第一部 物質文化研究の理論的地平

第二章 物質文化研究の理論と墓標研究

第二部 墓標研究の歩み

第一章 日本における墓標研究の歩み

第二章 欧米における墓標研究の歩み

第三部 近世墓標の民族学・考古学的分析

第一章 近世日本における墓標とその型式の変遷

第二章 墓標の形態変化と石材流通の諸相—淀川・木津川流域の事例—

第三章 墓標の石材にみられる地域的差異（1）—京都府南山城地区で採石される花崗岩の消長—

第四章 墓標の石材にみられる地域的差異（2）—奈良春

朽木量君提出学位請求論文審査要旨

論文題目 「墓標の民族学・考古学的研究—日本人の死にまつわる物質文化の構造・生成とそのハイブリディテイ

イー」

日裏山産カナンボ石の消長とその影響

第五章 葬送単位としての村と墓標造立の意味—奈良県旧磯城郡上之郷村六邑の墓制—

第六章 墓標のアセンブレッジからみた墓地空間

第七章 近世日本における墓標造立行為の復元

第四部 日系移民の墓標の民族学・考古学的分析

第一章 日系移民の物質文化研究と墓標

第二章 ニューカレドニア日系移民の墓標研究

第三章 ヌメアに生きた日系移民の生活財と墓標

第四章 ニューカレドニア日系移民の墓標造立行為の復元

とその意味

終章 民族学・考古学における墓標研究の理論的地位

本論文は日本における近世墓標と、近代ニューカレドニア日系移民の墓標という物質文化資料をとりあげ、その民族学・考古学的意義について論じるものである。その構成は、物質文化研究における墓標研究の理論的・方法論的整備を意図した第一部、考古学資料としての墓標研究のこれまでの研究成果について、日本及び欧米における研究史を比較検討した第二部、日本における近世墓標について、近世考古学、石材流通史、近世地域史などの視点から具体的な分析を試みた第三部、近代において南太平洋仮領ニューカレドニアの日系移民が造立した墓標をとりあげ、日系移民の墓標造立行為とその文化的変容について分析をおこなった第四部からなる。

第一部においては、これまで考古学が遺跡・遺物という物質文化を主たる研究対象としてきた経緯を踏まえ、それをさらに近年欧米とくにアメリカにおいて急速に進展してきた物質文化研究の脈絡の中で捉えなおそと試みる。考古学が扱う「考古学資料」と呼ぶ一群の物質文化資料を、民具学、生活財生態学、考現学、歴史学、文化人類学、さらには各領域に横断的に関係するアメリカ物質文化研究（アメリカ文化研究）などの諸分野にまたがる資料として位置付け、その理論的・方法論的基礎を整備しようと試みる。

この目的のために、「アセンブレッジ」と「ハイブリディティー」という二つの鍵概念が用意される。アセンブレッジとは、従来考古学が遺物研究に際して採用してきた複数の遺物ないし型式の組み合わせ状況を示す概念であり、また実体でもある。アセンブレッジが単なる個々の遺物や型式の集合ではなく、それらを生み出した社会とそこに属する人々の文化をも反映するものとする従来の見解を継承しつつも、その中に無批判に込められていた文化の均一性に基づく本質主義的な文化理解、つまりオーセンティックな文化の解釈に対して批判を展開する。

考古学において、研究者が取り上げたアセンブレッジに対する評価・解釈には、それぞれの研究者の文化価値が暗黙のうちに設定されており、そこには研究者による文化の排他的の独自性に基づく文化のオーセンティシティーが存在する。ハイブリディティーとは、諸文化間における文化接触や文化変容によつて生じる文化的多様性を差異としての文化として捉え分析する概

念であるが、従来はややもすれば単純な文化のオーセンティシティーを容認した上での異文化間の二項対立的要素を取り上げたり、その二者択一を行つたりする傾向があつた。本論文においては、このような文化のオーセンティックな理解に基づくハイブリディティーの概念を批判的に継承しつつ、文化間には常に相互における諸文化要素の接触・選択・交換が繰り返されている状況として捉えるべきであるとする。換言すれば、諸文化間の関係を特定の関心や状況からのみハイブリディティーの状態として捉えるのではなく、文化とは基本的には常にハイブリッドな状態に置かれていると考えるのである。

このような整理は今後の物質文化研究にとって極めて有効である。文化のハイブリッドな状況というものは、特定の文化に対する単純な同化や融合の結果ではなく、また複数の文化間の排他的な関係を二項対立的に拒否することでもない。なぜなら、そのような状況は特定の文化に盲目的に同一化することを拒みつつ、それらの部分的文化を選択的に自己の文化の中に再配置する行為を繰り返してきた主体によって、創造されてきたものだからである。これは異文化間の文化差異に直接対面している移民のような場合に限定されるのではなく、同一の文化の内部における異なる文化領域間（たとえば都市と農村）などにおいても考慮さるべきことである。その意味において、文化の差異を何らかの物質的特徴として捉える物質文化研究において、有効な分析概念として今後作用していくものと期待できる。

第二部においては、以上のような基本的な方法論上の整備の

うえに立って、墓標という物質文化資料の研究史を日本のみならず欧米、とくにアメリカにおける最近の研究動向と対比させる形で跡付けている。近年のアメリカにおいては、墓標の持つ研究可能性に対する評価が著しく高まり、アメリカ文化研究、アメリカ史、アメリカ民俗学、歴史考古学といった幅広い領域から総合的、学際的研究が多数行われている。これは従来の墓標研究が一部の石造工芸史、系図学といった狭い範囲に留まっていた状況から大きく変化し、アメリカ新大陸に移住してきたヨーロッパ系移民のアメリカ各地域への入植展開過程を明らかにしたり、各地域の民族的集団（エスニックグループ）の分布状況などを解明しうる資料として取り上げられるようになつてきただことを示している。

このようなアメリカにおける研究動向は、日本の墓標研究の革新を志す本研究の方針をある意味では先取りし、実践している場であるともいえる。これまでの墓標研究史において、本論文が取り上げようとするような異なる文化に属する墓標を国際的に比較検討する試みはほとんど行われたことがなく、このような研究史の整理を行うことは、墓標という地域文化色を濃厚に反映する物質文化資料を、より広い比較文化史的な脈絡の中で検討しようとする本論文の目的を達成するため、必須となる前提作業といえるとともに、優れた研究上の着眼点であると評せられる。

日本の近世考古学について限定してみれば、その学問的領域が確立してきたのはここ十年間ほどのことであり、近世遺物全

体に対する研究方法の整備は、必ずしも十分に行われているわけではない。本論文ではそのような現状を踏まえた上で、日本近世の墓標型式の分類や編年といった基本作業をこえて、墓標造立の社会的・歴史的背景の分析、石材の流通や選択をめぐる地域間の差異の比較など、新しい墓標研究の目指すべき枠組みが、研究史的整理を伴つて提示される。そしてその延長線上に、本論文の中心的課題といえる、特定の時代と地域を越えた広域な文化間における物質文化相互間の比較研究を指向する、いわば墓標という物質文化資料の通文化的研究の目的が明らかにされる。そしてこれが本論文の第三部、第四部における個別具体的な墓標研究への導入部となつていくのである。

第三部は日本における近世墓標について、民族学・考古学的分析をおこなう、本論文の中核を為す部分であり、綿密な資料収集と分析に裏打ちされた独創的な研究が展開される。従来の近世墓標研究においては、ごく小数の調査事例のみに基づいて近世墓標の歴史的・宗教的な性格を解釈してしまい、確実な事実に依拠して地域史の中に近世墓標を位置付けようとする方向性が希薄であった。これに対して本論文においては、南山城地域における諸村落の近世墓標を入念に調査し、その地域的、歴史的、社会的背景について考察がめぐらされている。本論文の優れた研究成果が示されている点として、まず取り上げるべき部分であろう。

その目的を達成するために、単にそれらの村落の近世墓標を調査するのみならず、それぞれの村落間の歴史的な関係について

て地方文書などを探索しつづきめこまかく復元し、それぞれの村落間における社会的関係の深さと墓標造立との関係をたどりうとする手法や、各村落が主として関係する交通路と墓標型式の選択との関連性を考察するといった分析が行われている。墓を立てるという行為が、それぞれの地域における歴史的な経緯を踏まえて行われている点を明らかにしているのは、墓標研究の新しい側面を提示したものと評価できる。

さらにこれらの墓標に用いられている石材と墓標型式の歴史的変遷を取り上げ、南山城の近世墓標は近世初頭においてはそれぞれ独自の石材を使用し、墓標型式もあまり統一されない傾向が強かつたのに対して、一八世紀以降になると和泉地方に特産の和泉砂岩を用いた櫛形の墓標に統一されてくる事実を指摘し、これが当時大坂に成立した石問屋とその回船による墓石の広範な流通開始によるものであることを明らかにした。これは考古学資料の分布や特定型式の地域を越えた展開の背後に、近世の商品流通が大きく関与していることを示している。このような経済史・商品流通史と考古学との接点については、すでに近世遺跡から出土する陶磁器の生産と流通について部分的に取り上げられているが、本研究においては地域を越えておこる石材の選択傾向を近世社会経済史の成果と結合させ、新しい近世考古学の分析視角を確固たるものとした点で、本論文のオリジナリティーを最も良く示す、優れた部分といえる。

これらに加えて、奈良県旧磯城郡上之郷村六邑の郷墓の調査においては、郷墓に墓標が伴うか否かは副次的な問題であった

可能性を指摘したり、静岡県駿東郡清水町下徳倉の龍泉寺墓地の調査においては、墓標の悉皆調査の結果について統計的手法を導入して分析を行つた。そしてそれに基づき墓地空間の利用順序を復元しつつ、墓地全体の歴史的な再構成を行う方向を明らかにし、墓標の墓地内における二次的な移動の問題を指摘するなど、随所に新しい発想と分析手法による成果を示している。これらはいずれも今後の墓標研究に資するものといえよう。

本論文の注目すべき点としては、以上のような近世墓標の個別分析的な成果のみにあるものではない。これらの分析を通じて物質文化資料としての墓標が大きくは石材・墓標型式の選択と言ふ次元で一つの齊一性を保持しつつも、それぞれの村落単位ごとに詳細に検討することから、墓標造立の地域的独自性が存在すること、そしてそれこそが物質文化資料のハイブリッドな状態を示すものであることを指摘する点にある。すなわち在地産の石材使用やその産出状況の変化、村落相互間の開発や分岐にかかる歴史的、社会的関係、墓標造立に関係した施主や石工の存在といった、さまざまな要因によって生じたこまかなる地域的差異に示される墓標型式とその分布の重層性のなかに、同一の文化システムの中における物質文化のハイブリッドな状態が顕現しているとするのである。

第四部においては、以上の指摘をさらに発展させる形で、同一の文化システム内におけるハイブリディティの指摘から一転して、通文化的なレヴェルにおける墓標型式のハイブリディティについて、海外での現地調査に基づく詳細な分析が行われる。

分析対象としてとりあげるのは、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、ニッケル鉱採掘のため、メラネシア諸島ニューカレドニアに渡航した日系移民の残した墓標とその他の物質文化である。

この問題を明らかにすべく、ニューカレドニア日系移民の島内における定着と拡散を背景に、彼らの造立した墓標形態・銘文の変遷、墓標造立行為に対する個別的分析が取り上げられる。さらに、第二次世界大戦開始直後に接收され、強制的に競売に付されたこれら移民たちの生活物資のリストに関する公文書を用いて、日系移民の家ごとの生活財を比較し、彼らの保持していた物質文化の特徴について、詳細かつ総合的にその歴史的、社会的背景を探ろうと試みる。

その結果、以下のような興味ある諸点が明らかになった。まず、初期鉱山移民として成功し、その後ニューカレドニア各地に拡散した日系移民の墓標は、日本のものと全く同一ではないにせよ、それと類似性の高いものが造立され、とくに第二次大戦以前の紀年銘には日本の元号が用いられている。しかし日系移民が最初に定着したニッケル鉱山に造立された墓の多くは、鉱山の自然石を用いる簡素なもので、そこに日本的な特徴を示す形態は表現されていない点である。次に、第二次大戦直前にニューカレドニア最大の町ヌメアに移り住んだ日系移民が用いていた食器、家具、調度用品などの物質文化の中には、各家庭に共通して西欧化が認められ、日系移民たちの生活が安定化するとともに生活様式そのものも西欧化していくことが指摘で

きるようになる。これらは、ニューカレドニアの日系移民が日常生活においてホスト社会の文化を柔軟に受け入れていく一方で、日常生活で使用しない墓標のような物質文化の要素においては、移民の定着度が安定するにしたがい、「日本」的な形態が意識されるようになつていつたことを明示している。しかし、このような傾向は、日系の一世、二世の世代までは引き継がれず、これらの世代においては、葬儀や墓参の方式が配偶者などの関係から多様化していくことも明らかにされる。

これらの結果に基づき、ニューカレドニア日系移民の生活変遷においては、母国文化からホスト社会の文化へと単純に移行していくのではなく、両者の間には重層的な関係が認められるとして結論付ける。すなわち、当地の日系移民の物質文化は、通常はハイブリッドな状態にあるものの、墓標建立などのような他のエスニックグループとの差異を意識するような場合には、母国文化へのアイデンティティが働いた形を取る、とする。そして、先に導き出した日本の近世墓標における同一の文化システム内でのハイブリディティーと同様に、日本とニューカレドニアという異なる文化システムをまたぐようなレヴェルにおいても、文化的ハイブリディティーの状態が指摘できる、という主張にいたるのである。

第四部に示された分析・解釈は、日本から七〇〇〇キロ以上も離れたニューカレドニアでの四年に及ぶ現地調査によつて集積された第一次資料に依拠している。この単身で行つた海外調査に注がれた労力は膨大なものがあり、またその成果の提示は

詳細かつ客観的なものである。これらの基礎データは優れて信憑性に富むものであり、今後の移民史、民族学、考古学のいずれの分野における研究にも、斬新かつ重要な貢献を果たすものといえる。そして、日本の近世墓標における分析と、近代日系移民が残した墓標研究とを結合させ、物質文化におけるハイブリッドな状態というものが、個別文化内でも、通文化的な状況下においても、同様な状況で捉え得ることを明らかにした点は、単に墓標研究のみならず、今後の物質文化研究における新しい通文化的分析視角と意味付けへの道を開いたものと高く評価できる。

本論文の成果について総合的な評価を与えるとすれば、以下の三点に要約できる。

- ① 日本の近世墓標研究を新しい視角で取り上げて分析をおこなつた。とくに民俗学、民族学、近世地域史、近世経済史にまたがる脈絡のなかで、その持つ歴史的意味を明らかにした。
- ② 墓標を、単なる考古学資料としてではなく、物質文化研究という複数の領域間に共通する資料として位置付け、その分析方法などを方法論的に整備した。
- ③ 墓標という資料が、单一の文化システム内で研究されてきた従来の枠組みをこえて、通文化的な状況における文化比較の資料として有効であることを、実例に基づいて実証的に明らかにした。

これらはいずれも墓標研究の新しい次元を切り開いた優れた

成果として高く評価される。しかしそれゆえにまた、本研究が今後とも克服すべき点についてもあえて指摘しておく必要がある。本論文においては、考古学資料を物質文化研究という領域にまで拡大し、その持つ豊かな研究可能性を示した。この試みは個別資料としての墓標の研究においては優れた説得力と成績を示しているが、考古学資料全体をかかる枠組みの中で取り扱う点については、なお一層の方法論的推敲と枠組みの明確化が求められるだろう。もちろんそのような点に関してはすでに本論文においても指摘されており、その目標としてモノ（物質文化資料）とそれを取り扱った人々との関係性の追及という問題が設定されている。そのこと自体十分に首肯される提言であるが、それを実現するための方法的準備が十全に計画されることは必ずしもいえない。この点に関する更なる研究の進展を期待するのは、ひとえに本論文に示された物質文化研究の方向性を、高く評価するからに他ならない。以上の点から、審査担当者三名は本論文が博士（史学）の学位にふさわしい内容を有するものであると結論するものである。

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員	鈴木 公雄
副査 慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員	阿部 祥人
副査 早稲田大学人間科学部教授	谷川 章雄